

言語社会研究科 博士論文要旨

著 者 尾崎 文太
論 文 題 目 エメ・セゼールの戯曲作品と政治思想
—1940年代から1960年代まで—
学位取得年月日 2009年3月23日

本論文は、フランス海外県マルチニックの作家=政治化であるエメ・セゼールの、1940年代から1960年代にかけての戯曲作品と政治思想を分析することを、その目的としている。

第1章は、エメ・セゼールの最初の戯曲作品である『そして犬たちは黙っていた』の分析にあてられる。本作品は、1946年に、詩集『奇跡の武器』に収められた一作品として発表されるが、10年後の1958年に単独の戯曲作品として再出版される。本論文では、この10年間を中心とする時期をセゼールの作家としてのキャリアの第1期と考えている。

第1章第1節では、本作品の2つのヴァージョンが創作された背景を説明し、次に本作品の内容構成についての概略が示される。

第1章第2節は、本作品の主人公である叛逆者のネグリチュードの精神が、いかなる戦略をもって、西洋植民地主義に対峙したかの分析にあてられる。また、その際、ジャン=ポール・サルトルがネグリチュードと黒人詩について論じた「黒いオルフェ」の分析を参照する。サルトルは、「ネグリチュード」は第一義的に「差異の意識」として、あるいは「記憶」として定義されるとしているが、それはすなわち、黒人が、自分たちは植民地主義の歴史の中で「数世紀において肉体的精神的打撃を耐え忍んできた」ということの意味と、その歴史の記憶を保持しているということを示している。その否定的記憶ゆえ、叛逆者は自らの世界を「夜」と規定し、歴史的に強制された否定性ゆえの「暗さ」を自らのものとして引き受ける。そして、そのような「夜の世界の住民」の言葉とは「非理性の言葉」すなわち「狂気の言葉」となる。しかしながら叛逆者は、「抵抗」のための手段として、その「狂気の言葉」を積極的に自らの武器として使うことになる。

第1章第3節では、叛逆者の「拒絶」の精神が、より具体的に分析されることになる。叛逆者は、2つの対象に向かって、その拒絶の精神を向ける。すなわち1つは、黒人の悲惨な状況の元凶である西洋の植民地主義に向けられる拒絶である。そしてもう一つは、その現状に対して「拒絶」の声を上げる力を持たない黒人の民衆に対する拒絶である。そして叛逆者は、その二重の否定の必然的結果として、その死を受け入れなければならない運命にあった。

第1章第4節では、叛逆者の死の意味について分析する。その際、フランツ・ファノンの『黒い皮膚、白い仮面』における「死を賭けた闘争を経ずに認知されたニグロ」に関する分析、ニーチェの『悲劇の誕生』における英雄の死の分析を参照し、最後にハイチ革命におけるトゥサン・ルヴェルチュールの死の意味を叛逆者の死に結びつけて考える。

第1章第5節では、1946年版の『そして犬たちは黙っていた』と56年版の比較をする。ここでは、

46年版においては終末論的世界観が確認されたのに対して、56年版では新世界の建設への意思がより強く示されていることが確認される。

本論文第2章においては、『そして犬たちは黙っていた』の発表された時期に重なる1946年から1956年にかけての、セゼールの政治思想とその実践について分析する。

第2章第1節では、政治家としてのセゼールの誕生のいきさつとその過程について説明をした後、彼が1946年に法案を提出して成立した「県化法」の意義を分析し、最後に同法がマルチニックにおいてはいかに受け止められたかを確認する。

第2章第2節では、県化法成立時のセゼールの政治思想に関して、「同化」というキーワードを参照しながら分析する。その際、セゼールの中で、自らのアイデンティティの喪失としての「文化的同化」と、制度上の平等化である「政治的同化」が区別して考えられていたことを確認する。また同時に、セゼールの政治思想にとって、フランス共和制の精神と「同胞愛」の概念が重要な意味を持っていることを確認する。

第2章第3節では、1946年に旧植民地の制度的平等化として成立した県化法が、実際の適用の場面に至って、いかに不十分な適用しかされなかったかを確認する。この同化法の不完全な適用のため、その後セゼールは、その政治思想の軌道修正を迫られることになる。

第2章第4節は、県化法が成立した後、1940年代後半から1950年代にかけてのセゼールの政治思想と政治的立場がいかに変化していったかの分析にあてる。セゼールは、共和制の精神によって体现されるフランスとは連帯の必要性を考える一方で、フランスの植民地主義に対しては徹底的な批判を浴びせる。その批判は『植民地主義論』の中で明確に示されるが、そこでセゼールは、ヨーロッパのキリスト教の欺瞞とブルジョア階層の台頭が、植民地主義の存続を助けたと分析し、キリスト教とブルジョア階層を痛烈に批判する。また本節では、同時期セゼールが、フランスの植民地主義への批判と同時に、マルチニックの特殊性の問題について考えていたことに注目し、彼の『文化と植民地化』、『モーリス・トレーズへの手紙』、『脱植民地化するアンティル』という3つの作品を分析する。セゼールは、『モーリス・トレーズへの手紙』において、共産党からの離党の意思を明らかにし、その後マルチニックの特殊性にあった独自の政党(マルチニック進歩党)の設立を試みることになる。

本論文第3章においては、我々が作家としてのセゼールの第2期と定義する1950年代後半から1960年代にかけて書かれた二つの戯曲『キリスト王の悲劇』と『コンゴの一季節』の分析を試みる。

第3章第1節は、それぞれの作品の創作背景、作品の歴史的背景、内容構成の説明に割かれる。

第3章第2節では、『そして犬たちは黙っていた』に比べて、この二作品に特有の特徴として教育的性質があげられるが、これらの作品はどのような意味で「教育的」なのかを、プレヒトの演劇などと比較しながら考察してゆく。

第3章第3節では、これら二作品の共通点についての分析がなされる。『キリスト王の悲劇』の主人公であるアンリ・キリスト王と『コンゴの一季節』の主人公であるパトリス・ルムンバはそれぞれ、黒人指導者としての「理想」を持っているが、二人の「理想」には多くの共通点が見られる。また同時に、これらの指導者は、ともに政治的な「失敗」を経験する。そして、その彼

らの失敗は、ともに彼らの「死」へと不可避的に結びついていた。本節では、これらクリストフとルムンバの「理想」「失敗」「死」が、脱植民地化と独立国家建設の文脈の中でいかなる意味を持っていたのかを分析する。

第3章第4節では、第3節とは対照的に、これら二作品の相違点を確認する。まず、『クリストフ王の悲劇』におけるクリストフは「独裁者」的性格の強いキャラクターとして設定されているのに対して、『コンゴの一季節』のルムンバは、人民に対して超越的指導者になることを拒み、「人民こそが国家の頭脳である」と考える指導者として設定されている。また、クリストフのアイデンティティは「ヨーロッパ的価値観」と「アフリカ的価値観」の間で引き裂かれた矛盾したものとして描かれているが、ルムンバは、新生コンゴの建設のために一貫した「アフリカ化」すなわち「脱ヨーロッパ化」をためらわない指導者として描かれる。また、『クリストフ王の悲劇』においては、クリストフの声は、他の登場人物の声をも統合するような超越的な力を持っていたが、『コンゴの一季節』では、ルムンバの声に対して多くの他者の声が立ち表れ、様々な登場人物の声が綜合に至らない矛盾のままに提示されている状況を確認してゆく。

本論文第4章は、セゼールの政治的キャリアの第2期である1950年代後半から1960年代にかけての、彼の政治思想とその実践を見てゆく。その時期は、第3章において分析された『クリストフ王の悲劇』と『コンゴの一季節』が執筆された時期に重なる。

第4章第1節では、1958年のフランス第五共和制発足の周辺のアフリカ諸国とマルチニックの動向を確認する。

第4章第2節では、1958年以降のマルチニックにおける対仏感情がどのようなものであったかを分析してゆく。同時期、マルチニック人の精神構造の中では、フランスに対する反発と依存が同時に存在していた。フランスへの反発の感情は、1959年12月のフォール＝ド＝フランスにおける暴動、1963年のOJAM事件などに象徴されるが、同時に、近代化の途上にあるマルチニックは、経済的、社会的にフランスに依存しなければならない状況にもあった。

第4章第3節において、同時期のセゼールの政治思想に関する詳細な分析がなされる。ネグリチュードの思想家としてのセゼールは、同時期、文化的な観点からの黒人諸民族の連帯を強く主張してきた。それは、政治的な独立を選択したアフリカ諸国とフランス海外県であるアンティューユの諸地域の連帯を可能にするものであった。しかしながらその一方で、セゼールは政治的な立場においてマルチニックの独立を一貫して否定する。そしてセゼールは、「同化」からも「独立」からも距離をとった立場である「自治」の構想を打ち出す。同時に彼は、「地域圏」「連邦制」「協同体制」などの概念によって、同化も独立も避けた形での、アフリカ諸国とフランスとの同胞愛と連帯を可能にする体制を模索してゆくことになる。